

病虫害の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦

育苗期では、ばか苗病が福岡、佐賀、長崎、大分の各県で多発した。原因として、ベノミル耐性菌の増加、種子消毒の不徹底などが考えられた。他の病害では、苗立枯病が福岡県でやや多発したが、それ以外はいずれも少発生であった。

本年は本田期においても一般的に各種病害の発生は少なかった。近年九州地域で増加傾向にあり問題となったもみ枯細菌病は、本年は少発生にとどまった。また、近年発生が減少傾向にあるいもち病は、本年も全般的に少発生であった。しかし、長崎県では早期、普通期ともに葉いもちがやや多発し、早期ではざりこみ症状もみられ、7月1日に注意報が出された。しかし、その後上位葉への進展は少なく、穂いちは品種「黄金晴」で局部的に多発がみられたものの、全体としては平年並みの発生にとどまった。

育苗期に各県で発生の多かったばか苗病は、本田期においても福岡、長崎、大分の各県、さらに宮崎県の普通期水稻でやや多発生となった。特に大分県ではベノミル剤に対する高度耐性菌が確認されており、的確な防除対策の確立が望まれる。これまでやや増加傾向にあった紋枯病は、長崎、熊本、大分の各県と沖縄県の2期作でやや多発した。佐賀県で7月26日に、大分県で8月9日に注意報が出されたが、その後好天に恵まれたために上位伸展がなく、大きな被害にはならなかった。

本年は台風の接近がなかったため白葉枯病は全般的に少発生であったが、大分県では、7月の集中豪雨による浸冠水を受けた地域でやや多発した。縞葉枯病は佐賀県と宮崎県の普通期でやや多発生となった。

地域的に発生が認められたものとしては、大分県で黄化萎縮病の発生が20年ぶりに確認され、褐色葉枯病が初確認された。鹿児島、沖縄両県でごま葉枯病がやや多発し、さらに心枯線虫病と黄萎病が鹿児島県でやや多発生となった。

九州地域の麦作に大きな被害をもたらす赤かび病は、本年は九州中部以北の各県で多発したが、4～5月の多雨と防除の不徹底が原因と考えられた。うどんこ病は福岡、佐賀、長崎、鹿児島各県のオオムギでやや多発した。オオムギ縞萎縮病は、各地で抵抗性品種の導入が図られてはいるものの、佐賀、熊本、大分の各県でやや多～多発生となった。赤さび病が佐賀県で多発し、黄さび病が福岡、佐賀両県でやや多発した。

2. 野菜・畑作物

トマト、ナス、キュウリ、イチゴなど果菜類の灰色か

び病は、本年も各地の施設栽培で多発した。春期の天候不順による多湿と、薬剤耐性菌の増加による薬効の低下が原因と考えられた。

ナス科野菜の青枯病は、熊本県の夏秋ナスで多発生、沖縄県の冬春ピーマンで一部多発生であったが、他は平年並みか少発生にとどまった。ナスすずかび病は福岡県でやや多発したが、佐賀県では平年並みであった。トマトモザイク病は、抵抗性品種や弱毒ウイルスの利用によって、全般的に並み～少発生に抑えられた。葉かび病が熊本県の夏秋トマトと鹿児島県の冬春トマトでやや多発した。ピーマンのうどんこ病が宮崎、沖縄両県で、斑点病が大分、鹿児島、沖縄の各県で、モザイク病が宮崎県で、それぞれ多発した。

キュウリべと病は、佐賀、長崎、鹿児島各県の施設栽培でやや多発したが、全般的には平年並みであった。斑点細菌病が大分、宮崎両県で、褐斑病が熊本、大分、宮崎の各県で、炭そ病が福岡県の露地栽培で、それぞれやや多～多発生となった。スイカでは、炭そ病とつる枯病が長崎県で、疫病が沖縄県の一部で多発した。メロンでは、つる枯病が長崎県で、うどんこ病が熊本県でやや多発した。ニガウリべと病が沖縄県でやや多発した。

イチゴでは、炭そ病が全般的に平年並みの発生であったが、うどんこ病が罹病性品種の増加によって、福岡、佐賀、長崎の各県でやや多発した。タマネギでは、べと病と白色疫病が長崎県でやや多発し、白斑葉枯病が佐賀県で多発した。ネギのさび病が大分、鹿児島両県で、べと病が大分県で多発した。ニラ萎縮病の発生が大分県で新たに確認された。ゴボウの根腐病と菌核病が大分県で、サトイモ斑点細菌病が鹿児島県で、ニンジンうどんこ病が長崎県と沖縄県の一部で、それぞれ多発生となった。エンドウ立枯症状とソラマメ茎腐病が鹿児島県の連作地でやや多発生となった。

ハクサイの軟腐病が熊本、大分両県で、白斑病と黒斑病が大分県で、キャベツ黒腐病が熊本、沖縄両県で、ダイコンべと病が大分県で、キャベツとダイコンの軟腐病が沖縄県で、それぞれ多発生となったが、いずれも多雨が原因と考えられた。キャベツ根こぶ病の発生が近年各地で増加傾向にあり、本年は大分県で多発生となった。レタスでは、軟腐病が佐賀、沖縄両県で、菌核病が大分、沖縄両県で、それぞれやや多発生となった。

ダイズでは、葉焼病が長崎、鹿児島両県で、白絹病が長崎県で、べと病が熊本県でやや多発したが、他の病害は少発生にとどまった。ジャガイモでは、疫病が多雨のため長崎、鹿児島両県で多発し、青枯病が長崎県の秋作でやや多発生となった。サツマイモの病害はいずれも少発生にとどまった。

3. 果樹

カンキツでは、そうか病、かいよう病、黒点病、灰色かび病などが全般的に多発した。原因としては、越冬菌量が多かったこと、5～6月の多雨、梅雨の戻りによる天候不順などが考えられた。ナシでは、黒斑病が福岡、長崎、熊本、大分の各県でやや多発したが、戻り梅雨が原因と考えられた。黒星病が、5～6月の多雨のため、佐賀、熊本、大分の各県でやや多発した。赤星病と輪紋病は全般的に少～平年並みの発生であった。ピワでは、がんしゅ病が長崎県で、灰斑病と赤衣病が鹿児島県で、それぞれやや多発生となった。

ブドウでは、黒とう病が福岡、佐賀、熊本、大分の各県で多発したが、5～6月の多雨、効果の高い薬剤がないことなどが原因と考えられた。べと病が福岡、熊本、大分の各県で、晩腐病と褐斑病が大分県で、それぞれやや多発生となったが、戻り梅雨が原因と考えられた。枝膨病は大分県で多発した以外は平年並み～やや少発生にとどまった。しかし、本病は品種「巨峰」で年々発生が増加しており、効率的な防除法がないため、九州地域のブドウ生産上で最も重要な病害となっているので、防除

法の確立が望まれる。

カキでは、7～8月の天候不順が原因で全般的に炭そ病が多発し、薬剤の効力低下が原因でうどんこ病がやや多発した。モモではせん孔細菌病が、福岡、熊本、大分の各県でやや多～多発生となった。キウイフルーツ、パイナップル、バナナでは、いずれの病害も少～平年並みの発生にとどまった。

4. 茶樹

輪斑病が鹿児島県で多発した。また、輪斑病菌による新梢枯死症の発生が各地で目立つようになった。炭そ病の発生は全般的に並み～やや多発生であった。

5. 特用作物

サトウキビの黒穂病が鹿児島県でやや多発生した。さび病と芽枯病は鹿児島、沖縄両県ともに多発し、これらの発生に品種間差がみられた。葉焼病の発生は、鹿児島、沖縄両県ともに平年並みであったが、沖縄県の八重山群島の常発地を中心に一部多発生がみられた。根腐病が鹿児島県で多発した。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

1988年 稲主要病害虫の発生面積

(単位: ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
葉いもち	14,669	3,515	1,300	3,000	7,530	8,378	12,246	42
穂いもち	24,847	2,800	5,000	7,300	9,401	13,941	12,285	30
紋枯病	44,197	21,000	12,000	35,000	27,550	22,415	25,498	196
白葉枯病	1,580	50	50	500	440	662	260	78
もみ枯細菌病	14,295	4,570	4,500	2,000	2,540	1,176	11,245	—
縞葉枯病	3,534	2,800	3,000	1,000	2,040	5,886	6,651	0
萎縮病	1,113	363	600	5,500	2,820	4,138	5,005	—
黄萎病	0	0	50	2	—	0	3,032	—
ごま葉枯病	6,720	1,090	3,300	1,200	5,700	3,384	15,638	444
ばか苗病	5,924	3,515	1,000	100	1,297	1,536	3,023	36
小心粒菌核病	0	0	1,000	100	800	0	—	—
心枯線虫病	8	0	200	100	9,900	282	9,478	48
(虫害)								
ニカメイチュウ第1世代	33	0	0	20	330	0	0	0
ニカメイチュウ第2世代	8.5	0	0	25	265	0	0	0
セジロウンカ	51,334	32,924	20,300	28,000	28,300	25,255	31,669	186
トビイロウンカ	35,318	18,840	20,300	34,500	19,060	14,430	16,803	180
ヒメトビウンカ	26,437	6,280	9,000	7,000	6,090	22,584	1,131	48
ツマグロヨコバイ	42,623	24,357	18,000	24,000	20,750	28,000	29,741	515
イネツトムシ	7,531	7,260	1,000	3,800	9,370	334	11,751	117
コブノメイガ	44,046	28,314	18,000	28,000	25,380	9,597	26,214	242
フタオビコヤガ	16	0	50	600	1,280	423	0	45
アワヨトウ	561	73	10	800	60	423	183	5
イネヨトウ	786	360	2,000	5,000	890	846	0	—
サンカメイチュウ	0	0	0	0	0	0	0	9
イネゾウムシ	7,761	1,815	3,000	9,000	4,840	4,230	5,382	100
イネミズゾウムシ	1,256.5	3,146	5,100	5,792	6,988	12,908	3,883	260
イネクビホソハムシ	1	0	0	0	175	0	0	22
斑点米カメムシ類	2,735	1,452	8,000	2,800	4,750	4,973	731	66
イネクロカメムシ	0	0	200	100	440	0	105	45
イネキモグリバエ	800	2,904	250	1,000	940	0	0	—
イネハモグリバエ	0	0	0	—	—	0	1,278	34
イネヒメハモグリバエ	0	360	200	300	7,440	1,692	0	13
スクミリンゴカイ	2,048	834	406	4,267	—	801	1,291	70
イネアザミウ	—	—	—	—	—	987	—	—
総作付面積 (261.975)	54,300	36,300	20,300	53,600	33,400	28,200	35,015	860

注) 宮崎、鹿児島などは早期、普通期の、沖縄は一、二期作の合計を示す。

〔害虫発生概況〕

1. 水稻

トビイロウンカ、セジロウンカの主飛来は6月下旬と7月中～下旬に同時にみられた。トビイロウンカの飛来量は昨年並みであったが、セジロウンカはやや多かった。トビイロウンカの飛来後第1世代及び第2世代の成・幼虫の発生量は昨年並みであったが、一部の早植え水稻や天候不順等により8月に防除をしなかったところでは坪枯れが生じた。飛来後第1世代の短翅雌率が約90%と高かったことも以後の増殖に影響し、坪枯れを助長したものと考えられる。セジロウンカの飛来後第1世代の短翅雌率も約50%と高かったが、その後の増殖への影響は大きくなかったものと思われる。

コブノメイガの主飛来は6月下旬から7月中旬にかけてウンカ類の飛来と同時に認められた。飛来量は昨年並みであった。第1世代成虫は7月下旬に、第2世代成虫は8月下旬以降に発生した。本年は飛来波数が多かったため、幼虫の齢期が乱れ防除適期を把握することが困難であった。出穂後も食害が続き、止め葉が食害された。

イネミズゾウムシは、小発生であった大分、沖縄以外では、やや多い発生であった。暖冬により越冬成虫の生存率が高かったことが多発要因の一つと考えられる。各地で分布が拡大しており、九州、沖縄における発生面積は本年だけで約14,000haも拡大した。

スクミリンゴガイも暖冬の影響で冬期の生存率が高かったことや、5～6月の大雨により各地で水田への浸入がみられたこと等により、一部の地域の水田で被害が認められ、補植が行われた。

2. 畑作物

カメムシ類が福岡、佐賀、鹿児島の大豆で多発し、8月下旬から吸汁、加害された。イチモンジカメムシとアオクサカメムシの発生が多く、ホソヘリカメムシの発生は比較的少なかった。佐賀では山麓地帯の一部で青立ちの被害もみられた。長崎、熊本、大分、宮崎での発生は少なかった。ハスモンヨトウ幼虫の食害による白変葉の発生は8月上旬からみられるようになった。8月下旬からの好天により、9月に入り一部で急増した。ミツモンキンウバは福岡、長崎の一部の地域で、9月上～中旬に多発した。

沖縄では夏秋期のサツマイモ収穫圃場でイモゾウムシによる被害が目立った。

3. 野菜

ミナミキイロアザミウマは各地のキュウリ、ナス、ピーマンでやや多発した。熊本では4月中旬以降に夏スイカで多発した。アブラムシは、大分のピーマン、鹿児島

のナス、スイカ、メロン、サトイモ、沖縄の冬レタス、オクラ、秋ダイコンで、コナガは各地のキャベツ、ダイコンでやや多発した。オンシツコナジラミは佐賀の施設キュウリ、熊本のトマトでやや発生が目立った。ハダニは各地のイチゴのほか、福岡のスイカ、鹿児島

4. 果樹

カンキツでは、ゴマダラカミキリが福岡で、ミカンハダニが佐賀、熊本、大分で、ミカンハモグリガが佐賀で多発した。ゴマダラカミキリは近年密度上昇の傾向がみられており、福岡の各地で被害が生じた。福岡のカキではフジコナカイガラムシが近年多発傾向にあるので注意が必要である。カキクダアザミウマは佐賀で多発した。暖冬により越冬量が多かったことが多発の一因と考えられる。本年新たに大分、鹿児島でも発生が確認されるなど、発生地域が拡大している。大分ではクリタマバチが多発した。近年恒常的に多発する傾向がうかがえる。

5. 茶樹

チャノキイロアザミウマは、福岡では9月以降の少雨により秋季に発生が目立った。宮崎では5～7月の好天で2～3番茶で多発したが、9月には密度が低下した。鹿児島では8月上旬に中切園で被害が多かった。チャノミドリヒメヨコバイは、宮崎では2～3番茶の一部で多発し、鹿児島では3番茶摘採後にやや増加した。沖縄では9月以降の少雨により、10～12月に発生が目立った。

クワシロカイガラムシは、鹿児島で第2世代が、佐賀、長崎で第2、第3世代がやや多発し、一部で被害が生じた。チャノホソガは熊本で越冬世代、第1世代で多発し、鹿児島では中切園で増加した。

6. 特用作物

沖縄のサトウキビでは、カンシャクシコメツキが沖縄本島でやや多発したほか、アオドウガネが宮古・八重山の常発地帯及び与那城村の一部で多発し、マージ地帯では新植圃場の一部でメイチュウ類が多発した。また、カンシャワタアブラムシは暖冬のため発生が早く、前年夏植え圃場を中心にやや多発した。

鹿児島県のサトウキビでは、大島地区でカンシャクシコメツキが多発し、メイチュウ類がやや多発した。

(九州農業試験場地域基盤研究部)